

# 再歩

～再建までのみち～

かじわら さだよし  
梶原 定義 さん (91)

行政区：安永3町内



地図を見ながら目的地を目指しますが、目印となるものも見当たりません。そんな中、どこからともなく聞こえてくるピアノの音色に誘われて行ってみると、そこが今回、話を伺う梶原定義さんの家でした。

取材をお願いした時、ユニットハウスで自宅を再建されたということでしたので、どのような家かという思いでしたが、そこに建っていたのは想像していたシンプルなものではなく、落ち着いたこげ茶色のおしゃれな建物でした。

震災当日、一人暮らしの梶原さんは、タンスの下敷きになって気を失っていたところを、近所の人たちに助けられたそうです。平屋で約40坪の自宅は全壊でしたが、体は少しのけがをした程度で良かったです。

## 「大変でした。でも自分のためだから」

たと言います。近所の人の車で一晩過ごし、その後は熊本市のめいの家に2週間ほど滞在しました。それから、友人の世話で熊本市西区のサービス付き高齢者住宅（みなし仮設住宅）で約1年半の生活を送ることになります。

自宅再建を考え始めたのは、昨年の夏ごろ、テクノ仮設団地に建てられたモデル住宅を見学に行ったことがきっかけだったと言います。それから、阪神淡路大震災を経験し再建されたさまざまな住宅を目にしていた娘さん家族の助言を受けながら、再建方法を探していた梶原さん。ユニットハウスによる自宅の再建は、孫の一言がきっかけでした。そこで早速、町内に建てられていたユニッ

トハウスを見に行きました。

「ユニットハウスは東日本大震災でも需要が多くあったそうです。たくさんある製造会社の中から、インターネットで長野県の会社を探してくれた娘に現地まで見に行ってもらい、こちらの要へ



望を取り入れてもらいました」

ユニットハウスは、建築工程のほとんどを工場で行い、現地で組み立てることで住居ができます。長野県から安永の自宅敷地までトラックで運び、クレーンで吊り上げながら組み立てたら設置工事が完了です。7月下旬、約100坪の敷地に14坪の自宅が完成し、10月1日に入居しました。居間と台所と寝室、一人で住むのには十分な広さです。ピアノを置くスペースも確保できました。建築資金には生活再建支援金、義援金、震災前の家の地震保険金などを充てました。

「大変だったことと言えば、熊本市西区のみなし仮設住宅から自宅までバス

で片道1時間10分ほどかかったことです。新しい家に住むための準備に、安永まで十数回は通ったでしょうか。毎回一日がかりでした。でも自分のためですから」

新しい家への引越作業では、安永仮設団地に入居している隣近所の人たちにお世話になったという梶原さんは、「人は一人では生きていきません。今でも、仮設住宅に住みながら畑の世話をしてくれる友人や、野菜などを持ってきてくれる友人がいます。ご近所との付き合いが一番です。本当にありがたいです」と感謝の心を忘れません。

これから毎日をどのように過ごしていくのか尋ねると、「地震前に通っていたプールで知り合った仲間が、心配して訪ねてきてくれました。また水泳を再開するつもりです。それと、2005年8月に出版した『地下水、その噴き出するを願って』の改訂作業をライフワークとしています。あと1年ほどかかると思いますが」と答えてくれました。

今回の地震のような大きな災害のとき、近隣の人たちとの助け合いがいかに大切かを、身をもって体験した話を聞くことができました。

91歳とは思えない若々しい梶原さんです。最後にピアノ演奏をお願いしたら、いつも弾いている童謡や歌謡曲の中から「船頭小唄」を弾いてくれました。

90年前から奥さまの実家にあつたという古い時計が、これからは新しい家です。時を刻みます。